マルクス経済学の弔鐘を打ち鳴らす「英雄たち」

——その「偉業」の客観的意義について——
（マルクス主義理論の再検討のための「序説」として）

山本　二三丸

目　次

まえがき
Ⅰ　大木啓次氏による「マルクス経済学の破産」の宣告
1．大木氏の著書『マルクス経済学を見直す』の組み立て
2．「見直す」の意味
3．マルクス経済学の「見直し」の内容
4．マルクス・レーニン主義の「見直し」の内容
5．大木氏の著作の客観的意義
Ⅱ　岡田裕之氏による「社会主義世界体制の崩壊とマルクス経済学の終焉」の宣言
おわりに
（マルクス主義理論の再検討のための「序説」として）

まえがき

1989年，「ベルリンの壁」の崩壊にはじまる東欧「社会主義」諸国の支配体制の崩壊，そしてついには本山のソ連邦「社会主義」体制まであっけなく総崩れになるという，まさに世紀的大変動を前にして，多くの人々が，その事態の真相を知る術がなく，これらをどのように受けとめるべきかについて答えることもできなかったのは，まことにむりからぬことといえよう。ところが，衝撃などうけるどころか，まさに間髪をいれず，勇躍してこの大変動を迎え，これこそ天与の教訓だとして，これまで細々（ほそぼそ）とつづけてきた共産主義攻撃をマルクス主義攻撃にまで拡大して，一段と声高く反共カンパニアの展開をはかったのは，いわずと知れたこと，とうの昔からの有名無名の反共闘士の面々である。そのなかでも一段高く頭角をあらわして人目をひいたのは，だれあろう，「歴史学者」の名の高い林健太郎氏であったのである。

林氏は，右の大変動をきくや，１年もたたないとき，はやくも，われわれ凡人には逆立ちしてもとうてい読むことすらできない『倨傲（きょごう）の宗教の終焉』という題名の論文を発表し，ついでそれは文芸春秋発行の『マルクスの誤算』と題された著書の巻頭を飾るものとなったのである。誰にも読めないような難題のこの小論文を発表してその碩学のほどを天下に周知せしめた「歴史学者」林氏は，この小論のなかでは，歴史学者の名は返上して，ソ連・東欧の歴史的事情は

まったく問題にせず，ひたすらマルクスを「疑似宗教」の「宗主」に仕立てあげ，その「疑似宗教」が首尾よく破綻したのだという断定をくりかえし並べたてているのである。だが，長年にわたって「マルクス主義」と渡り合ってきた一方の旗頭(はたがしら)だけのことはあると感心させられるのは，この先生が，その小論のなかにつけている多くの小見出しのなかで，つぎの二つをゴシック体でかかげていることである。――「地球の三分の一を覆った共産主義」，「批判は必然的にマルクス主義にも及ぶ」（傍点―山本）。

林先生がことさら見出しにかかげているこの二つの命題のうち，とくに後者は，これからわれわれが検討を加えなければならない「マルクス経済学の弔鐘を打ち鳴らす英雄たち」の出現をはやくも的確に言い当てているものであって，この事実ひとつによっても，つとにその名を馳せた反共闘士林先生が，その名にそむかず，さすが「英雄たち」のはるか先きを行く文字どおりの「先達(せんだつ)」[1] だけのことはあると，感心させられるのである。

ところで，当面われわれが切実な関心をもってはっきりと見究めなければならないのは，いうまでもなく，反共学者の反応などではなく，これまでマルクス経済学の専攻を看板としてきたいわゆるマルクス経済学者の右の「大変動」にたいする反応である。いやしくも科学としてのマルクス経済学を真剣に研究し，その研究成果を適時論文の形で発表するという，当然の義務を自覚し，すくなくともその遂行にいささかでも努力を傾けている研究者・学者であるならば，なにを究明すべきかは，疑問の余地なく明らかである。肝心なことは，なにが，なぜ崩壊したかを突きとめることであり，そのためには，それらの国がはたして社会主義の名に値する実態をそなえていたか，それら崩壊した諸国の支配体制の本質とその形成過程はどうであったかということを明確にすること，これらが先決要件でもあり，第一の究明課題でもあることは，疑う余地すらないのである。ところが，この「君子国」日本には，残念ながら，その名に値するマルクス経済学者・大学教授は，ひとりも現われなかったのである。民主主義国，フランス，アメリカその他には，少数ながら現われた[2] というのに。

1）林先生の「先達」ぶりにはまったく感心させられるが，その小論の内容そのものは，とうていいただけないので，私はただちに筆をとって『マルクスの誤算か，それとも俗流学者の誤算か？――「東欧大変動」が生みだした貴重な告白――』という表題で論文を書き，『立教経済学研究』第44巻第4号（1991年10月発行）に掲載していただいたのである。この論文は，その後まもなく出版された拙著『社会主義の虚像と実像』（青木書店発行）の中に，『虚像の崩壊に歓喜する俗流学者』と題する第二章として収録されたのである。その内容がどんなものであるかを読者諸君に感じとっていただくために，元の論文の中の最後の節のうちからほんの一部分をぬいてかかげておくことにしよう。「まともな論証ひとつも示しえないで，「倨傲の宗教」というたいそうな文字をぶつけるだけで自らの誤算を韜晦するとは，また，なんという「自由」な「学者」であろうか？「倨傲の俗流学者」とは，まさしくこうした俗物（Philistine）にお誂え向きの文字ではあるまいか？」（前出，174ページ）。

2）この数少ない外国の真実の経済学者の中で，抜きんでて美事な成果をあげているのは，フランスの有名な経済学者，シャルル・ベトレーム（Charles Bettelheim）である。彼は，かなり長期にわたってソ連に滞在し，特別の便宜をえて，蒐集可能なかぎりの資料を詳しく研究し，帰国してその成果を

上に述べたようなその名に値する真実のマルクス経済学者が現われなかったばかりか，これまでソ連を社会主義国とふれまわっていた大方の「マル経学者」は，ソ連・東欧崩壊のニュースに接して，そこでどのような対応をしたかといえば，「さだめしこれからはマルクス経済学の売れ行きはぐんと落ちるだろう」との考えが先きに立って，ソ連・東欧諸国についての研究などは，これまでもろくにしなかったが，その手間も省けたと内心のよろこびをかくして，いちはやくマルクス経済学批判者の列に加わって，学者的権威と経済的利益との二つを確保しようと企てる連中が生まれ，しだいにふえてゆくという，世界にその類例を見ない学問的陣営大移動という珍現象が発生したのである！　この驚くべき「転向」は，これまでわが国のマルクス経済学者を糾合してマルクス経済学の研究とその発展を推進する目的でつくられた「経済理論学会」をも支配するほどにひろまり，この学会の年次報告大会では，マルクス経済学について，取るに足りないような言葉尻の「批判」やら「誤謬指摘」を報告して得意になるという「研究者」がしだいにふえていくという結果を生みだしているのである。だが，客観的にみれば，こうした「批判者」たちは，マルクス経済学全体の構造はもとより，個々の基本的範疇についての完全な無理解を暴露するだけのもので，いわばケチなアラさがしの部類に入るもので

発表したのが，有名な労作『ソ連邦における階級闘争』(Les Luttes de Classes en URSS) である。これは，全三巻，1700ページ余の大作であるが，その最後の第三巻は，1930—1941年，まさにスターリン頭目の支配した期間を取り扱い，「支配する者」と「支配される者」との2冊から成っており，その中には，彼スターリンがソ連の内外でいかに陋劣，非道，残虐の限りをつくして，レーニンの遺訓をことごとく踏みにじり，ナチス・ヒトラーのそれを上回る煉獄さながらの社会帝国主義的体制をつくりあげていたかということが克明に解明されているのである。ところが，わが国では，その実態もわからず，社会主義体制が支配していたとか見当違いのタワ言を書きまくる大学教授が続出したり，ひどいのになると，レーニンにけちをつけるために行論で見られるような，なんとも言いようのない陋劣・破廉恥きわまりないデマを，なんとその著書に書きたてるという，まさにキ印的大学教授さえ生まれるという体たらくなのである。私は，ベトレームのようにソ連国内に行ってその実態を調査することはできなかったが，1936年のスターリン憲法いらいのこの頭目が得意になって広告していた著書・論文やフルシチョフの演説などを，マルクス・レーニンの文献と読み合わせただけでも，ソ連が社会主義どころか，レーニンがくりかえし強調していた「社会主義への入口のはるか手前のところ」で低迷しているきわめて低い段階の過渡期社会でしかないと判断したのである。そのため，その当時ソ連・中国に関する研究者の間で支配的であったソ連を社会主義国とする潮流に抗して，それが低い段階の過渡期社会にほかならないことを解明した労作をくりかえし発表したものである。それらの論稿のうちから3篇だけをつぎに挙げておこう。

『資本主義・共産主義・社会主義・過渡期　——経済学の根本問題——』(一)，(二)，(三)，(『立教経済学研究』第33巻，1，2，4号，1979—1980年)

『共産主義，社会主義，過渡期の特徴づけによせて』(雑誌『ソ連問題』別冊11号，1979年)

『社会主義とはなにか？　——その俗物的解釈と科学的規定——』(一)，(二)，(三)，(四)，(完)(愛知大学法経論集，経済・経営篇，第101～104号，106号，1983～1984年)

なお，以上のほかに，世界中の共産党，労働者党からマルクス主義学者までこぞってけんめいに担ぎまわった例の『スターリン論文』の反科学性を徹底的に批判した長篇の論稿があるが，これについてはいずれ別稿でふれることにしたいと考える。

しかなかったのである。ところが，である。さすが「自由と民主主義」のしろしめすこの「君主国」である。マルクス経済学全体を俎上にのぼせて，たちまちこれを一刀のもとに屠り去るという，真に驚嘆に値する「英雄」が，二人も，ほとんど時を同じくしてこの国に出現したのである。それはほかでもない，立教大学名誉教授の肩書をもつ大木啓次氏と法政大学教授岡田裕之氏である。大木氏はそのたった一冊の高々197 ページの著書『マルクス経済学を見直す』をもって，岡田氏は，それよりはるかに少ない僅々17ページばかりの小論文『社会主義世界体制の崩壊とマルクス経済学の終焉』ひとつで，たちまちのうちにこの「壮挙」をなしとげたのであって，円月殺法の眠狂四郎ごときは逆立ちしてもとうていかなわぬ手練の早業を見せたのである。とりわけ，岡田氏の腕前は想像を絶するほどのもので，その論稿の表紙に書かれた題名だけでマルクス経済学をあの世に送りこんでしまうという偉力をもった達人なのである。これに比べると，大木氏の方は，いささか見劣りもするし，腕前も岡田氏のそれに比べるとまだ免許皆伝というところまでには参らず，そのために「マルクス経済学」を一瞬のうちに屠り去るという岡田氏の真似はできないのであって，あれやこれやと骨を折って，レーニンまで傷けたり，ときには自分の手や足に切りつけるという奇妙な口さばきさえ演じてやっと「マルクス経済学」を仕止めるということにこぎつけているのである。このようにいささか刀さばきに違いはあっても，「マルクス経済学」全体をてもなく屠り去るという点では，兄たりがたく弟たりがたしで，われわれは，これからこのお二人の達人，いや「英雄」がどのような手で「マルクス経済学」全体を葬り去るという「偉業」をなしとげ，首尾よくその「弔鐘」を高らかに打ち鳴らすことに成功したかということを，お二人の著作を通じてしっかりと学びとることにしたいと思うわけである[3)]。

Ⅰ　大木啓次氏による「マルクス経済学の破産」の宣告

1．大木氏の著書『マルクス経済学を見直す』の組み立て

まずはじめに，大木氏の著書『マルクス経済学を見直す』がどういう論説から組み立てられ

3）この二名の「英雄」の「マルクス経済学」退治の腕前のほどをこれから学びとろうというわれわれにとって，ただひとつ，頭の中からどうしても拭いきれないのは，この両名とも，マルクス経済学の体系的研究に生涯を捧げられ，マルクス・エンゲルスの不朽の理論体系を『マルクス・レキシコン』全15巻の形でまとめあげられた日本でほとんど唯一ともいうべき傑出した経済学者，久留間鮫造先生の知遇を得て，そのおかげでマルクス経済学の手ほどきを教えられたばかりでなく，両名とも，右の『マルクス・レキシコン』の各巻の見開きに「協力者」と麗々しくその氏名が印刷されている上に，岡田氏のごときは，久留間先生の大学院講義をうけ，恐らく先生の推輓で大学教員の職につくことができたと想像されるにもかかわらず，惜しくも先生が他界されたあとの今日，先生が生涯をその研究に捧げられたマルクス経済学を弊履のごとく投げ捨てたばかりか，これをことごとく葬り去って弔鐘を打ち鳴らすという，言語に絶する忘恩・破廉恥な所業がどうして公然とやりとおすことができたかという，深刻な疑問と尽きることのない侮蔑と憤懣（ふんまん）の思いである。

ているかということをはじめに示された目次についてみてみよう。この著書はふつうの学術書とちがって，序論からはじまって第一章，第二章というように理論を展開していったものではなく，様々な論説を雑然と並べただけのもので，章，節の区切りはない。止むなく，各論説の表題の頭に「論説Ⅰ」,「論説Ⅱ」というような記号をつけて写しとり，これからあとの検討のさいの便宜をはかったものであることをおことわりしておきたい。なお，この著書が出版されたのは1994年1月であることを銘記しておかれたい。

（論説Ⅰ）「マルクス・レーニン主義の破産」

（論説Ⅱ）「マルクスの労働価値説を見直す」

（論説Ⅲ）「ベーム・バベルクのマルクス批判によせて」

（論説Ⅳ）「マルクスの剰余価値説を見直す」

あとがき

なお，これらの論説のもとになった論文が，それぞれいつ，どこで発表されたものかということを著者がその「あとがき」で記しているので，これからの検討にとって少なからず参考になるものと考えられるので，これらは（論文1），（論文2）という記号を頭につけて引用しておくことにしよう（傍点は山本のもの）。

（論文1）「ソ連邦に社会主義社会は建設されたか？　20年後の検証」『立教経済学研究』第36巻2号（1982年12月）

（論文2）「マルクス価値論を見直す――価値の論証と使用価値の捨象」『経済評論』（1991年2月号）

（論文3）「マルクス・レーニン主義終焉の論理と現実――資本主義崩壊論の破綻と社会主義の崩壊」『経済評論』（1992年2月号）

（論文4）「マルクスの労働力商品論を見直す――賃金は労働の価格である」『経済評論』（1993年1月号）

（論文5）「マルクスの剰余価値論を見直す」『経済評論』（1993年5月号）

ふつう学術的著作を書籍の形で発表するときは，その本文に先きだって必ず「序文」または「まえがき」（Preface, Vorwort または Einleitung, Avant-propos, предисловие）を明確に書き記して，その著作を著わすにいたった動機なり根拠なりを明らかにし，どのような観点に立って，どのような問題を，どのように論究するかということを――その全部でないまでも，その一端なりとも――説明して，読者にあらかじめ必要な予備知識と心構えとをもたせるようにつとめるのが常識であって，こうした必要不可欠な「まえがき」または「序文」のまったく欠けている著作は，文芸作品か漫画本だけである。ところが，「マルクス経済学を見直す」というたいそうな，一見学術書かと思わせるような表題をいただいた大木氏の著書には，この肝心なものがまったくぬけ落ちているのである。必要不可欠の Preface が欠落しているということは，著者本人が，その書いた内容の意義をまったく自覚していないか，それともそうした意

義などまったく考えずに，いわばやたらに書きまくったということを——大木氏の得意とする「論証」ではなく——まさに実証するものである。この動かすことのできない事実は，「まえがき」なしで書き集めた種々雑多の表題の論説のこれからの吟味によってまもなく実証されるところである。

「まえがき」を全くとりはらった大木氏は，右の著書の末尾に「あとがき」なるものをつけているが，これはまた，通常の「あとがき」などとはまったくちがったたいそうな自己宣伝と反共右翼ばりの「やっつけ文句」の陳列といった代物(しろもの)なのである。とはいっても，著者御本人にはわからず気付くこととすらできないが，この「あとがき」の中には，これからの大木氏の著書および著作活動（などといえたものなどまったくないが）の中味がどんなものであったか，そして現在どんなことになっているかという，きわめて重大な本質的問題をすっかり解いてくれる決定的な素材が十分にふくまれているのであって，そうした素材をはっきりととりあげ，それがもっている意味内容を論理的に——ただし，事実に則して——解き明かしてゆくことは，多少の労苦を伴うことはあるとしても，われわれには，美事な青磁の花瓶に付着した汚物を拭いとるときのように，一抹の不快感を伴った深い清涼感を与えてくれるであろうことは疑いをいれないのである。そこで，つぎに，その「あとがき」の中の「聞かせどころ」を順次に抜粋して，読者諸君にまず紹介申しあげ，それらの叙述のうちに秘められた構想の妙味にふれるためのヒントを示唆することにしよう。そのために，はじめに「あとがき」からの抜粋部分を順次括弧して（イ）「……」というような形にして引用し，その一つづつについて簡単な注釈を加えてゆくということにしたいと思う。

（イ）「この本は，著者である私にとっては反省の書でもある」（前出，194ページ）。

この「反省の書」という言葉の意味は，われわれ読者にとっては理解の域を越えたものである。いったい，なにを，どう反省したのか，そもそもなにを反省してそれからなにを得たのか，ということは，まったくわからない。しかし，氏の著書を一読してはっきりわかるのは，肝心の反省すべきところをすこしも反省していないこと，反省という聞こえのいい言葉をつかって，さもなにかを「反省」してつくった本であるかのように見せかける飾り文句だということである。正確にいうならばまさに反省すべきところを反省していない事実をごまかすためのはったり文句だということである。

（ロ）「……その時期に，私は学生時代に入った。そして以後40年にもわたって，マルクス，エンゲルス，レーニン，スターリン，毛沢東等の著作，社会主義文献の勉強をつづけ，幾多の疑問はもちながらも，彼らの理論は基本的に正しいものと信じてきていた」（前出，194ページ，傍点—山本）。

ありもしない嘘を並べてそれがさも本当にあったことのように工夫しても，所詮その言葉そのものがウソだったことを明かしてくれることになるのである。まず「毛沢東等」とい言葉は40年にわたって毛沢東の基本的文献を一冊すら読んでいないことを物語っている。つぎに40年

にもわたって勉強してきた男が，その40年ののちにも「幾多の疑問」をもつなどということがよく言えたものである。大木氏には最後まで――つまり現在でもなお――経済学が経済法則を体系的に解明した唯一の経済科学であるという肝心なことはわからずじまいなのであるが，そもそも科学を40年も勉強したあげくに「幾多の疑問」をもちつづけたり，「その正しいことを信じてきている」などというたわごとがよく言えたものである。たとえば物理学という科学を40年勉強してきたというもっともらしいふれこみの男が，「幾多の疑問はもちながらも，その理論は基本的に正しいものと信じてきていた」などとひとにしゃべってみたとしたまえ。これを聞いたひとは一人のこらずこの男を底なしの低能か，性悪（しょうわる）のエセ物理研究生だとして，相手にしないであろう。ところが，右の大木氏の口説（くぜつ）はもっと腹黒い陰険な意味をふくむものとしてことさらかかげられているのである。つまり，「当時は，幾多の疑問もりっぱに持っていたし，確信などなくて軽く信じていただけだ。だから（!!）疑問に思っていたとおり，マルクス主義も破産し，ソ連もつぶれるということになったのだ」と，こういうことをあとで並べ立てるために仕入れた伏線なのである。

右の文句だけ聞かされて，事実についてなにひとつ知らない善意の読者は，おそらく大木氏の思う壺にはまることであろう。だが，大木氏がこの40年間にどんな勉強をし，どんな成果を挙げていたものかということを少しでも知れば，おそらく大木氏にたいする讃嘆と同調の念は，軽蔑と嫌悪の念に確実に一変するはずである。

大木氏がこの「あとがき」を書いた日付は，1993年11月と記されている。40年前といえば1953年である。ところが，大木氏が意識的に書き記すことをやめているのは，経済原論の担当教員として経済学の講義をつづけるかたわら，その「勉強」の成果をまとめて教科書として作成し出版したのが著書『経済原論』であり，その初版刊行の日付は1986年12月であり，それ以後定年退職する直前の1994年～５年まで，これを唯一の教科書としてきわめて多数の学生への「経済学基礎理論」の講義が続けられてきていたという事実である。ところが，である。あとで詳しく――論証ではなく――実証されるように，この教科書『経済原論』（その前半部分を大木氏が書き，後の半分は他の教授が担当して書いた）の中味は，この1994年になって出された「見直し」著書の中に展開されているところとは残らず正反対のものであるのである!!　つまり，40年のうち38年間勉強し，主張し，講義し，発表してきた理論を，退職まぎわの１，２年になってすっかりひっくりかえし，いままで主張し講義していたものの「破産」を大々的に宣伝するというのが，大木氏の新著の目的なのである！

それにしても，40年近くにわたって「勉強」し，「教科書」に書き，30年近くにわたって多数の学生諸君に講義しつづけてきたその成果，その内容をば，ここにきてその全部を誤りだ，「破産したもの」だと公言するなどということは，大木氏がどんなに頑丈な心臓と厚い面皮とをそなえた人物であろうと，とうていできることではない。そこで，右の教科書『経済原論』は伏せたまま，一言も，おくびにも出さない。それでも足りない，化けの皮が剥がれるおそれ

がある。そこで，マルクス経済学を悪しざまにやっつける（やっつけることができたかどうかは，あとですぐわかることである）だけでは心安からず，今度は，「マルクス・レーニン主義の破産」を大声で叫びたて，ソ連社会主義――例の『教科書』ではソ連を社会主義とするのは誤りだと強調している――の崩壊を書きたてるばかりでは足りず，マルクス・レーニン主義者――こういう名称のついた人間はこの地球上には残念ながらいらっしゃらないのだが――からすすんではレーニンその人までも引合いに出して，「殺人鬼，虐殺魔」などという，まさに気違いそっくりの妄言を口走らずにはいられない，というところまで，行きつくことになっているのである。この種の人間にとって，その本来の症状が表立って現われる機縁となったのは，いうまでもなく東欧諸国・ソ連の崩壊というマスコミのニュースであることは，読者諸君にもすでによくおわかりのことであろう。

右に述べたような動かしえない「物的証拠」＝著書『経済原論』の所在そのものを湮滅（いんめつ）するためにことさら「反省の書」とのふれこみで書きはじめられたこの「あとがき」が，どんなに見苦しい陋劣な悪罵に必然的に終わらざるをえないかということを如実に教えてくれているひとくさりを右の「あとがき」の終りの方から引用してかかげ，これをもって「あとがき」についての簡単な吟味を一応終えることにしよう。――「……しかし，マルクス・レーニン主義者たちは悔いあらためているわけではない。旧ソ連邦においても，その他の旧社会主義国においても，マルクス・レーニン主義勢力は，政治的復讎（!?）の牙（!?）をみがきながら，執拗に再起をねらい，残存社会主義国（!?）や資本主義国においては，衣がえ（!?）しつつも，マルクス・レーニン主義勢力のひきしめ（!?）と延命（!?）がはかられている（!?）」[4]（前出，196ページ，（!?）および傍点―山本）。

2．「見直す」の意味

さて大木氏の著書の「あとがき」の内容について，「40年にわたって勉強してきた」という確言を聞かされ，その「勉強」を始めてから30年余り経たところで教科書『経済原論』が作成・出版されてその後10年あまりたったところで，この教科書の内容（大木氏担当分）を全面的に

4）大木氏がその著書をつくるもととして挙げている5論文のうち，論文2，3および4について私がゴシック体と傍点で示したところをよくお読みいただきたい。これらの論文を載せた雑誌『経済評論』は，いずれも学年末試験の直前に売り出され，立教大学事業部の書籍販売部に数百部山積みされているのを私は目撃したものである。学生に訊くと，試験問題は一年間教室で講義されてきた『経済原論』からではなく，この雑誌論文から出され，それについて書いてなければ評点は悪いとのことであった。一年間講義してきたこととまるきり反対の，教科書の内容をことごとく葬り去っているような論文を半ば強制的に買わせ，それから試験問題を出すなどということは，まともな大学教授にはとうていできる芸当ではない。そのためか，この雑誌は出版社によって廃刊されたとか。大木先生は，あとでもまたふれるように，この著書をもって，退職後またぞろ某大学の教授に納まり，恩給と給与とを合せて首尾よく高額所得者の名誉をかちえることになったのである。

ひっくり返した論文がつぎつぎ作成され売り出されて，それが最後に著書『マルクス経済学を見直す』に首尾よく結実したものであるということを学びとることができたわれわれにとっては，なぜそのような180度の転回，言いかえればまさしく「寝返り」ともいうべき事態が生じたかということについて，その根拠となり動機となりえるものを推しはかることはさして骨の折れることでもないと思われる。そのヒントもまた，右の「あとがき」があたえてくれているのである。

「40年にわたって勉強」しながら，なお「幾多の疑問をもって」おり，ただ「彼らの理論が正しいものと信じてきていた」と自供しているような「勉強家」は，なにか一身上の利害に影響を及ぼすような大きな事件にぶつかったときには，てもなくぐらつき，その安手の信念などすぐに消し飛んでしまうものである。ところが，幸いにも，その疑問や信仰をたちまち吹きとばしてくれ，これまでとまったくちがった新しい展望が開ける可能性を秘めている大事件が勃発してくれたのである。それが，東欧・ソ連の崩壊である。これまで「幾多の疑問をもち，もっぱら信仰に頼ってのみこんでいた」ような危ふやな，そして右の大変動によって先行き不利益となるような「理論」をいつまでも担いでいることはまったく不得策である。こんな「理論」とはいち早く手を切って，自分はそんな「間違いだらけの理論」とはもともと無縁のものだったということを広告しなければならない。その広告をもっとも効果的にやりとげるには，これまで「疑問だらけでよくわからず，ただ景気がよさそうだということで信じてきた理論」の誤謬やら缺点やらをあばきだして大いに宣伝するにかぎる，つまりアラをうんと探し出して大々的に書き立てること――これが最短にして最善の策である，とこういうわけである。

それゆえ，「見直す」という日本語は正常な意味をもったものではなく，きわめて独特な，見方によっては，きわめて陰険な，腹黒い内容を秘めた言葉なのである。なぜそのように解釈しなければならないかといえば，通常は，「見直す」といえば，間違っているところ，一般には具合の悪いところを見つけてそこのところを直す，つまり訂正して本来正しいものにおきかえる，ということを示すものとしてつかわれているのである。間違ったところ，歪んだところを指摘しただけでは，ただ悪いところ，アラを見つけるだけで，見直すにはならないのである。

大木氏が，マルクスのうちたてた壮大な経済学理論体系について，どんなことが「見直せる」かは，さきに30有余年の「勉強」を通じてつくりあげ，長年講義してきた『経済原論』（前半部分）を一読すれば，すぐにもわかるところである。つまり，本来の，正常な意味での「見直し」などということはとうていできっこないのである。それゆえ，そのマルクス『資本論』からのいいかげんな抜き書きでこしらえていた『経済原論』に打ってかわって，今度は「マルクス経済学の見直し」が問題だなどと書きたてているのは，要するにマルクスの壮大な経済学理論体系について，本格的見直しなどはとんでもないこと，片々たるアラ探しをするだけのことであり，そのアラ探しは，すぐあとの考察でてもなくばれるように，自分自身の救いようのない無理解，でたらめな解釈，そしてとどのつまりは論理的思考力の完全な欠如と斜視的思考癖

とを実証するものとなっているのである。それゆえ，大木氏の著書は，名誉教授などという肩書にとらわれることなく，その本質を改めてはっきりと見直すためのまたとない素材としてりっぱに貢献するものであること，――このことが以下の論究によって――論証ではなく――実証されるであろうことを期待してよいのである。

以上によって大体の様相はすでに読者諸君にはよくおわかりのことと思うので，これからの大木氏の著書の内容についての吟味はできるだけ要領よく手短かにすますことにしよう。

3．マルクス経済学の「見直し」の内容

『マルクス経済学を見直す』という壮大なタイトルはかかげられているが，大木氏が「見直し」ているのは，マルクス『資本論』の第一巻第一章第一節のはじめのほんの一部分だけ――これが著書の論説Ⅱの内容の全部である――を扱った論説Ⅱと労働者が売っているのは労働力ではなくて労働だという主張を並べただけの論説Ⅳとの，たった二つだけである。

どこをどう「見直し」たかを見るには，大木氏が40年近くにわたって「勉強」してきて把握した成果をまとめて20数年にわたってそれを教科書として講義しつづけてきた『経済原論』の該当個所とつき合わしてみなければならない。

第一の「見直し」点は，つぎのとおりである。

『教科書』の説明――「**価値の実体を究明する意義**　商品の価値は，商品の交換価値の分析――抽象力を極度に緊張させての分析――をとおしてはじめて認識されうる。商品の交換関係あるいは交換価値によって表示される諸商品に共通な本質的なものが商品の価値である。そしてある使用価値が価値をもつのは，商品を生産するいろいろな労働に共通な労働，つまり抽象的人間労働という社会的実体がそれらのものに対象化され，結晶しているからである。ところが宇野弘蔵氏は，商品分析において，価値の実体まで明らかにすることはできないし，してはならないと主張する」(『経済原論』，32―33ページ，ゴシック体――大木氏のもの)。

『見直す』の説明――「小麦の交換価値というならば，それはあくまでも小麦そのものの属性なのであって，小麦をはなれてはありえないだろう。小麦そのものに内在するものなのである。そして小麦の交換価値は，そのさまざまな現象形態とは別の小麦自身に内在する本質的なものなのである。したがって，そのうえさらに交換価値の本質として，交換価値とは別の「ある同じ物」などというものを考える必要はないということになるだろう。小麦の交換価値のほかに，その交換価値を現象形態とし，その交換価値の本質であるような「ある同じ物」は，商品経済においてはおよそありえないのである」(**前出，90ページ，傍点―山本**)。

要するに，40年近くにわたって「勉強」してきてやっと『資本論』を真似て商品の交換価値の分析から価値をひきだしたのもつかの間，たちまち，「見直し」にぶつかって価値など不必要だし，そんなものはこの世には存在しない，あるのは交換価値だけだという主張に早変わりさせられてしまうのである。いや，大変結構である。「小麦の交換価値は小麦に内在している

もので，たとえばそれと交換される靴墨とか，卵とかとはさらさら関係ないものだと主張する大木氏よ，では，x量の小麦はy量の靴墨となぜ交換されるのか言ってみたまえ。小麦自身に「内在し」て他の商品とはまったくかかわりのないのが交換価値だというのならば，その小麦ひとりだけでどんな交換価値をもっているか，いや，そもそも交換価値などという言葉そのものがまったく余計な，成り立ちえないものではないか。小麦の交換価値はたしかに小麦自身のものにちがいない。だが，それは他の商品との交換においてのみ，その交換価値が示され，その交換される割合においてのみ小麦自身がもっているその交換価値の大きさが示される。その他の商品で示されたものが，とりもなおさず，小麦の交換価値なのである。「小麦に内在するもの」というたったひとつの言葉にしがみついて交換価値という言葉，つまり概念の内容を十分正しく把握しようともしないで，他の商品との交換，つまり交換関係においてのみ示されたものが交換価値だということがわからないということを，自分の口からひろく広告するとは，またなんと笑うべき「見直し」屋であろうか！

大木氏の「見直し」がただ言葉の端々(はしはし)をとらえて愚にもつかぬ言いがかりをつけるだけのものだということをこの上なくよく示してくれる例を，この論説の中から，いまひとつだけ，あげてごらんにいれよう。

著書の「論説Ⅱ」「マルクスの労働価値説を見直す」の内訳は，目次によれば，つぎの4節から成っている。——労働生産物の商品形態，交換価値の面からの商品分析，商品体の使用価値の捨象，労働生産物の使用価値の捨象。この後半の二つの言葉を見ていただけば，大木氏の脳中にあるものが，どんなに正常な思考力を超えた世界無比のものであるかが感じられるのであるが，その思考力——というよりは思考癖と言ったほうがはるかに適切であるが——を駆使してマルクスの重大な誤りを摘発した文章をつぎにお目にかけよう。

マルクスの文章を引いたところで，大木氏はこう述べたてる。

「すなわち，使用価値が捨象されたあとの労働生産物には，抽象的人間労働の対象化されたものである商品価値が残っているといわれている。商品価値が使用価値が捨象されたあとの労働生産物に残るというのである。マルクスにとっては，労働生産物の価値は商品の価値なのである。労働生産物の価値が商品の価値に，労働生産物が商品にスリカエられているのである」(前出，123 ページ)。

ごらんのように，大学教授大木啓次氏は，労働生産物と商品とは全くちがった別々のものだと思いこんでいるのである。『資本論』についてすこしでも真面目に勉強したひとであれば，商品という言葉は，資本主義社会における労働生産物の形態規定をあらわしたもの，丁寧にいえば社会的な形態規定を示す概念だということは容易にわかるはずであるし，この形態規定という言葉について全く知らないか，全くわからないひとは，いくら『資本論』を何十年と読みつづけようとも，本当にわかったというところまではいけないのである。大木氏は40年にわたってマルクスの『資本論』の「勉強」をつづけてきたと言明している。だが，『資本論』の中に

アラを探し出そうとしてこれを開けて見るような根性のひん曲がった人間には，この形態規定という決定的に重要な概念は逆立ちしてもわかりようはないのである。それがどんなに重要な意味をもつものかということを――理解することなどとうてい望むべくもないので，――少しでも感じとることができるようにするために，かりに大木啓次という名称を借りて説明してさしあげることにしよう。

ここに複数の人がいて，こう言ったとしよう――「大学教授大木啓次は，手のつけられないほど悪質・腹黒の，破廉恥きわまりない詭弁屋のデマゴーグだ」と。おそらくその連中は汚いものに向ってのように異口同音にこう言うであろうが，大木啓次君はいくらこう罵られようと，平気の平左であるはずだし，名誉毀損などと言って色めくこともないはずである。彼は甘んじてその適評を受け容れてこう言い返すのである。――「なんだ，君らはマルクスと同じ間違いをやらかしているではないか。大学教授と大木啓次とはまったく関係のない別々なモノ――生キモノ――だ。手のつけられないほど悪質・腹黒(はらぐろ)の，破廉恥きわまりない詭弁屋，デマゴーグは大学教授の方で，大木啓次とはなんのかかわりもないのだ。下手なスリカエなど，だれが聞くものか！」　要するにわが大木氏には，大学教授というのは自身の社会的な形態規定であるなどということは，爪のアカほどもわかっていないのである[5)]。

論説Ⅲと論説Ⅳは，例によってもっともらしい，だが滑稽で見るも無惨な題名をいただいているものだが，その中味を詳しく読んでみる必要はまったくない。というのは，論説Ⅲは，例の教科書『経済原論』の26ページから27ページにかけての数行と読み合わせればその本質は一

5）大木氏の著書のこの論説は，その「あとがき」にも明記されているように，『マルクス価値論を見直す――価値の論証と使用価値の捨象』という表題で，1991年2月号の雑誌『経済評論』に掲載されたもので，30有余年の「勉強」の結実としてマルクス『資本論』からのいい加減な抜き書きでこしらえあげた『経済原論』の一年間の講義を聞かされた学生諸君は，その『経済原論』の中の記述を全く否定したこの雑誌論文を購読しなければ課目「経済原論」の合格点をいただけないという，前代未聞の立場に，――なんと500有余人が――おかれたのである。当時私は書籍部に山積みされたこの雑誌を見て学生諸君の話をきいたが，この卑劣行為を摘発する術もなく，止むをえず，この大木氏の論文を――あたかも汚いものにさわるような思いで――とりあげ，その内容がどんなにひどいものであるかということを疑う余地なく解明したものとして，拙論，『マルクス『資本論』を超越するもの――大木啓次氏労作『マルクス価値論を見直す』の出現――』を書いて本誌第45巻第1号（1991年7月）に掲載していただいたのである。この「超越するもの」という言葉は，形態規定という基礎的概念ひとつ知らないで――それでよく久留間先生の「マルクス・レキシコン』の「協力者」になれたものである！――マルクスにケチと言いがかりをつけている大木氏を軽蔑し，揶揄する意味であえてつかったのであるが，大木氏は，知ってか知らずしてか，この拙論には一言の論駁もおこなわず，その著書に，この陋劣きわまる論をまたぞろ収めて学生に――『経済原論』と平行して!!――読ませているのである。まさにさきほど大木先生にならってかかげた「大学教授大木啓次」という言葉がぴったりあてはまって，美事な実例を提供するものとなっているのである。ところが，なんと驚いたことに，この形態規定についての無知・無学を「論証」し「実証」してやまないこの論文を天まで高く誉めあげるという，典型的オベンチャラ癖の大学教授も現われているのである！　まさにタイコ持ち大学教授！――このタイコ持ちはこの種の大学教授の「社会的形態規定」そのものである！

目瞭然であり，論説Ⅳについては，簡単な質問を二つだけ提起するだけで万事明瞭に理解されてしまうからである。

まず論説Ⅲの『ベーム・バベルクのマルクス批判によせて』の中の一部分の抜粋。――「ベームの指摘するように，マルクスは『資本論』の最初のところで商品分析をおこなうにさいし，それとことわらないままに，商品の共通な属性，交換価値がそれをあらわしている「ある共通物」なるものをもとめるために，労働生産物である商品だけを対象としているのである。そして後になってはじめて，社会的分業の説明にことよせるかたちで，それとなく，労働生産物である商品だけが，商品分析の対象となってきていることを説明しているのである。

しかしながら，ベームもいうように，「自然の賜物は，土地をふくめて国民的富のはなはだ重要な構成部分」となっているということができるだろう。それは，今日でもいえることである。

……（中略）……

こうして，マルクスが商品の交換価値となってあらわされるある「共通物」なるものを探究するさいに，商品となっている労働生産物のみを対象としたこと，商品となっている土地等の自然物を除外したことは，ベームのいうように，方法上のゆるすべからざる根本的な過ち，あるいはむしろ，ゴマカシといえるであろう」（前出，121―122 ページ）。

ごらんのように，ベームの尻馬に乗ってなんとかマルクスをやっつけようと躍起になって並べたてるのは，どれもこれも自分自身の論理的思考の完全な欠如と経済学という社会科学の研究対象についての誤解・曲解，総じて概念規定についての無知と錯覚である。大木教授は土地は労働生産物でない富であってりっぱな商品ではないかと得意になって言い立てている。これで，氏自身が富と商品との区別が分からなくてごたまぜにしていることがわかる。富とは，人間の生活を支え，役立つものの総称として用いられるのであって，さまざまな自然物，たとえば河川，海洋から太陽の光線までもはいる。だが，大木氏が土地を富といっているのは，ある価格をもつものとして，また価格をもつかぎりでの土地，つまり商品としての土地を言っているのである。だが，土地が価格をもって商品となるのは，資本主義社会だけのことであって，それ以前の社会にはなかったのである。つまり，なぜ土地が商品になるかということは資本というものがどういうものかがわかってその資本が生まれてからのこととしてはじめて解明される。ところが資本はまた貨幣が生まれてから数百年後にその貨幣から生まれたのであるから資本を説明するためには貨幣から説明しなければならず，貨幣がどうして生まれたか，そもそも貨幣とはどういうものかということがまえもって解明されていなければならないし，また貨幣とはどういうものか，どのようにして生まれてき，人間を（たとえばその辺の大学教授などをも）支配するようになってきているかということを解明するためには，貨幣という特別の商品が生まれる以前の商品生産の段階について，商品とはどういうものかということを，まず労働生産物について解明しなければならない。労働生産物でないものでは，人間の生活は支えられ

ないし，商品生産の歴史的に始まった当時の人間社会では労働生産物でないものは商品にはならなかった。労働生産物のみを商品として始めて商品の本質が究明でき，その究明にもとづいてはじめて，商品生産の歴史的発展の中から貨幣が生まれたものであること，貨幣の本質はなにかということが始めて正しく解明される。ベームの尻馬に乗ってマルクスの過ちやらゴマカシやらを書きたてている大木先生よ，なぜ土地やその他の自然物のような労働生産物でないものが商品となるか，また商品として価格をもつかということを，あらかじめ商品・貨幣の究明なしに，説明できたら，やってみせたまえ。経済学の範疇というものが人間社会の経済的・歴史的発展の反映としての論理的展開に対応したものでなければならないという，唯物史観の基本的命題をことごとくふみにじって，ベームの尻馬に乗ってマルクスを論難しているこの教授先生は，つい先きごろ，久留間先生の著わされた世紀的著作『マルクス・レキシコン』のうちの「唯物史観」と題された巻の扉に「協力者」と麗々しく記されている。なんという破廉恥な，そして肝心のその巻の内容を全部忘れたばかりでなく，これをふみにじった文章をひけらかして得意になっているとは，またなんと下劣・醜悪な「協力者」であることだろうか!!

ところで，大木教授がベームの尻馬に乗ってマルクス攻撃の挙に出たのは，1994年1月のこと，この1994年1月の直前まで大学での講義に使っていた，30有余年の「勉強」の結実ともいうべき著書『経済原論』には，つぎに見られるように，マルクスの商品論を擁護してベームの批判を撃退している文字が連ねられているのである。

「マルクスの労働価値説にたいする批難攻撃の典型として歴史的に，かつ世界的にも有名なものは，ベーム・バベルク（1851—1914）によるものである。これには，わが国でも小泉信三氏（1888—1966）をはじめとする追従者があらわれたものである。

ベームは，マルクスは商品交換にさいしての等置関係における使用価値の捨象後には，ただ労働生産物という属性だけがのこるというけれど，そこで捨象されるのは特殊な使用価値だけなのであり，そのあとには，各商品に共通なものとして使用価値一般がのこるのだと主張し，ひいては，交換価値の根拠を価値と労働にではなく，その使用価値一般，効用にもとめようとするのである。では，はたしてベームのいうように，特殊な使用価値の捨象後に使用価値一般がのこるであろうか。

……（中略）……　だから，A商品もB商品もそれぞれの特殊な使用価値のほかに使用価値一般をもっているわけではなく，特殊な使用価値の捨象後になおのこるような使用価値一般なるものは，もともと批難者たちの頭のなかだけにあって，じっさいにはなかったのである」（『経済原論』26—27ページ）。

ごらんのように，30有余年マルクス『資本論』を「勉強」してきた末にようやくベームをばとるに足りないただの「批難者」ときめつけた教科書を出した教授先生が，一年間その講義をし終えたところでベームは正しくてマルクスは間違っていると書いた論文の載っている雑誌を学生に買わせ，それによって採点するという前代末聞の芸当を演じているのである。こういう

人物が小泉氏をけなしておいて，にわかにその「追従者」になってベームを担いだところで，小泉氏ですら，相手にはしないであろう。

つぎは論説Ⅳ，「マルクスの剰余価値説を見直す」であるが，目次に示されたその各節の題目のうち，つぎの三つだけ読みさえすれば，こと足りるのである。――「労働力は商品化しない」，「労働力の価値はありえない」，「労働は商品になる」。

40年近くものあいだ『資本論』を「勉強」してきてつくりあげ10年以上にわたって，右の「見直す」という表題の論文が受験のための必読文献として雑誌『経済評論』（1月号）で売り出される直前まで，「教科書」の中に明示されているつぎの叙述を一読すれば，大木氏の頭脳の中はもとより，その品性まで手にとるようにわかるのである。つぎに引用するのは，『経済原論』の「6章　労賃」の冒頭の「**労働力商品の価値の労賃への転形**」と題された節の最初のわずか4行の文字を引き写したものである。

「**「労働の価格」と労賃の本質**　　資本制社会の表面では，労働者の賃銀は労働の価格として現象している。

だが，科学的見地からすれば，労賃が労働の価格であるというのは馬鹿げたことである」（前出，133ページ，ゴシック体―大木氏のもの，傍点―山本）。

この引用した叙述のすぐあとには，「なぜならば，第一に……，」「また第二に……，」「また第三に……，」というようにして，「労働者が売っているのは労働であって，労賃は労働の価格である」という主張がいかに「馬鹿げた主張」であるかということが詳しく説明されているのである！

こういう180°方向転換――というよりまったくの「寝返り」の常習犯とは，理論についてあれこれ議論するのは「馬鹿げた」ことである。それよりも，このでも大学教授――このでもというのは，あれでも大学教授か，というときのでもに相通ずるものである――につぎの二つの質問を出して，どんな答えが返ってくるか――多分，返ってくる可能性はきわめて少ないとだれしも思うにちがいないが――を見定めることにしたほうが，簡単かつ明確であろう。

6）大木氏はその著書の中では，教科書とちがってくりかえし「賃金」という文字をかかげておいでである。大木君よ，まあ試みにこの文字を読んでみたまえ。チンギンなどと読もうものなら，羽生名人ならずともすべての良識ある人々に嘲笑されるであろう。この賃金という文字を発明してひろめたのは，旧制一高の先輩で，むかし老大家と共同してマルクスの名著一冊を翻訳して出したというだけで――ほかに見るべき著書は一冊もなくても――マルクス経済学の大家という評判をかちえるほどの才覚あるM教授であるが，この先生がはじめて，「大学教授と乞食とは，三日やったらやめられない」という格言を私に教えてくれ，またそれをみごとに実証してみせてくれたものである。この先生は，もっぱら，マルクスの叙述7割，それに3割のいいかげんな説明をつけるという方法で本を生産しつづけたものであるが，ある日，私にこう説明したものである。――「賃銀はお金である。お金は貨幣である。貨幣は金である。だから，賃銀は誤りで賃金とすべきである」と。この尻とり遊びのようなタワ言を私はとんでもないごまかしとして取り合わなかったが，なんと前衛党の指導者と称する人々はもれなく感心したと見え，組合の賃銀闘争は賃金闘争に書き改められ，しまいには，国語について

大木氏よ，君は，著書の中で「賃金[6]は正真正銘，労働の価格なのである」（前出172ページ）とくりかえし強調している。だが，労働とは，人間の労働力を支出すること，簡単にいえば，頭，手，足などを動かす運動である。賃銀はお金であって，たとえば，1万円とか2万円とかいうように貨幣で示されたもの，つまり価格である。その人間の身体を動かす運動とお金とをどうやって結びつけるのか，わかりやすく説明してくれたまえ。オシャカさきが逆立ちしてもできないことだが，詭弁の天才である君ならばできるでろう。はっきりと説明したまえ。

いまひとつ，君は40年近くマルクス，エンゲルス，レーニン，スターリン，毛沢東等の著作を「勉強」してきて教科書『経済原論』（前半部分）をつくって退職するまでそれを学生諸君に講義してきたが，その内容は全部間違いであり，「馬鹿げたこと」であり，「見直されるべきもの」であることが退職まぎわになってやっとはっきりしたと公言しておいでである。その間違いだらけ，馬鹿げたこと，「見直されるべきこと」を40年近くにわたって「勉強」し，「教科書」に書き，「講義」しつづけてきたという，その「労働」にたいして，君はひとの羨むほどの高い賃銀をもらい，おまけに自分でも「多過ぎる」と公言するほほど高額の恩給[7]——これも賃銀の一形態である——を頂戴しているのである。何十年という長い年月頂戴した右の賃銀と恩給の人並外れた額は，いったい，どういう労働にたいする報酬としてもらうことができたのか，

やかましい文部省のお役人どもまで，この賃金を採用し，全国津々浦々に行き渡らせたのである。つまり，前衛党の指導者たちから文部省のお役人にいたるまで，この尻とり遊びのマヤカシにひっかかったのである。そのマヤカシのタネは，「お金は貨幣である」というところにある。今の日本での賃銀はなるほどお金（かね）ではあるがそれは俗称であって，本来の貨幣つまり金貨幣ではなく，不換銀行券である。それは，政府のインフレ政策によって日に日にその代理価値が低落する紙片なのである。もし，賃銀が金であるならばインフレは起りえず，われわれは不断の物価騰貴にも貯金の著しい目減りにもまったく心配することはない。つまり，この大先生は，賃金という迷語を発明して，前衛党の指導者たちがマルクスの教示をふみにじるのを助け，文部省の役人の頭を狂わすという，まさに一石三鳥の偉大な発明をなしとげたものなのである。大臣，代議士のお歴々さえ賃金と書き，チンギンと読んで得意となっているこの「自由と民主主義」の日本のことである。マルクスをかるく「見直し」てしまうほどの大木氏である。前衛党の指導者がそろって広告したこの賃金を採用したとて，なんのわるいことがあろうか。

7）昨年1995年7月，新たに名誉教授になった先生方を招待して立教大学総長が催した名誉教授祝賀会の席上で，大木氏は総長に向ってこう言明したとのことである。——「立教大学の恩給は高過ぎるからもっと減額すべきである」と。これを聞いたなみ居る新名誉教授の先生方は，一人のこらず，「自分がどこかの大学に拾われて高給にありつき，恩給と合せて高額所得者になったからとて，われわれの恩給まで減らすべきだなどと，とんでもないひどいことを言うゴマスリ野郎めが」と，憤慨と軽蔑の念をおさえて大木氏の顔を見やったということである。大木氏とまるっきりちがって，平素真面目に「勉強」し，退職まぎわになって30年以上「勉強」してきたことはみな大間違いだったと雑誌に書いて学生に買わせたりするという前代未聞の「労働」をしながら，そのいかがわしい「労働」にたいしてどういう「労賃論」を利用してか，高額所得をふところにまんまといれることに成功した大木氏とまったくちがって，けんめいに「労働」してようやく足りるか足りないかの恩給をいただけるようになった教授先生方が，一様に限りない軽蔑と憤懣をこめて大木氏の顔をつくづくと「見直し」たのは，しごくもっともなことというべきであろう。

賃銀は労働力ではなくて，労働の対価だという，「馬鹿げた」主張をまたぞろ拾いあげてマルクスにケチをつけるのに懸命の大木君よ，はっきりと説明したまえ。

4．マルクス・レーニン主義の「見直し」の内容

さて，以上によって『マルクス経済学を見直す』という氏の著書の主題に相当する著者自身の主張の内容がおよそどんなものであるかということは疑う余地なく明白なものとなった。それは，マルクス経済学の「見直し」などといえたものではなく，40年近くの年月をかけて「勉強」したあげくに，マルクス『資本論』をうのみにした間違いだらけの『経済原論』の「見直し」であり，そのアラ探しでしかなかったのである。大木氏の著書は『マルクス経済学を見直す』とあるが，その目次をみてもすぐわかるように，論説Ⅰは，「マルクス・レーニン主義の破産」と題され，本文192ページのうち80ページ，つまり40％以上もの紙幅を占めている。だから，「マルクス・レーニン主義の破産」をなんとかうまく読者に呑みこますためにⅡ・Ⅲ・Ⅳの「自説見直し」の論説がいわば添え物としておかれたということ，そして狙いはマルクス・レーニン主義の攻撃にあったこと，その下心をかくすために『マルクス経済学を見直す』という書名がひねりだされたものだということがわかるのである。そこで，つぎにその本命ともいうべき論説Ⅰの内容のあらましについて見てみよう。この論説Ⅰの主張内容のあらましは，その末尾におかれたつぎのいわば「要約」がこれを示している。

「マルクスの唯物史観とその資本分析への適用である資本主義崩壊論，レーニンの資本主義崩壊論とプロレタリアートの独裁論が誤りであったこと，ひいては彼らの社会主義と共産主義も誤りであったこと，マルクス・レーニン主義が敗退し，破産せざるをえなかったことに，もはや議論の余地はない。それは世界史の展開という，これ以上はない実践によって検証されたし，なお検証されつつあるといえよう」（前出，80ページ）。

そこで，まず「マルクスの唯物史観と資本主義崩壊論」とが槍玉にあげられる。この論説Ⅰの右の題目の最初の一節で，大木氏は，マルクスの『経済学批判』の「序言」の中に示された有名な「唯物史観の公式」を引用してかかげたところで，「そのポイントは『社会の物質的生産諸力は，その発展がある段階に達すると，……既存の生産関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は，生産諸力の発展諸形態からその桎梏に一変する。このとき社会革命の時期がはじまる』ということにある」と述べ，さらにそれについてマルクスが付け加えている「但し書」――「社会構成というものは，すべての生産力がそのなかではもう発展の余地がないほど発展しきらないうちはけっして没落することがなく，……」――を引いて，まずつぎのように言っておくのである。

「このただし書きを裏がえしていえば，社会というものは，そのなかでいっそうの発展の余地がなくなるほどに経済が発展しきれば没落し，新しいより高度な社会によって必然的にとって変わられるものだと，マルクスが主張していることになるだろう」（前出，10ページ）。

ついで，大木氏は『資本論』第1巻第24章第7節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」の中の有名な「収奪者は収奪される」という文章に終る一節を引用して，その内容をこう説明する。——「資本独占の成立は，資本主義がもう発展の余地がなくなるほどに発展しきったことを示すものなのだ。そして，資本主義より高度な社会主義の生産関係が生まれてくるべき物質的な存在条件が，資本主義社会の胎内に充分にととのったということになるのだ。それに呼応して労働者階級の反抗もつよくなる。かくて，資本主義経済も終わりをつげることになる，というのである」(前出，13ページ)。

ここまでのところを読者がのみこめば，あとの料理はしごく簡単である。——「だがしかし，マルクスがそのように資本主義経済の死を予言してから，すでに1世紀半もの月日がたっている。それでもいまだに，資本主義経済が発展しきったうえで崩壊した歴史上の事例はない。マルクスとしては，もともと，資本主義の将来について，百数十年以上もの先のことを予言していたわけではない。たいして遠くない将来のこととして，むしろ，明日おこってもおかしくないくらい間近のこととして予言していたのである。しかしながら，資本独占が生まれたといわれても，資本主義が倒れた話をきくことはなかったし，20世紀の今日まで，資本主義的私的所有の弔いの鐘も鳴らなかったのである。マルクスは経済恐慌を，資本主義が発展しすぎたためにおこるものと考えていた」(前出，14ページ)。

ごらんいただければすぐわかるように，大木氏の主張はいたって簡単・明瞭である。マルクスもレーニンも，「資本独占」ができれば，もうそれで資本主義経済は発展しすぎたことを示すもので明日にでも倒れていいと予言しているが，ちっともその徴候すらないではないか，だからマルクスの唯物史観もマルクス・レーニンの資本主義崩壊論もみな破産したことは証明ずみだ，とこういうわけである。マルクスの唯物史観にしても，レーニンの資本主義崩壊論——こういう「論」はどこにもなく，資本主義社会の社会主義社会への変革＝移行の法則を説いた理論というものだけしかないのだが——にしても，そのことを述べた文章の読み方はいろいろあるものである。肝心なことは，歴史的社会の運動法則の正しいとらえ方にある。一つの歴史的社会，——たとえば封建制社会——がつぎのより高い社会——たとえば資本主義社会——に変革＝移行するまでに，つまり，一つの歴史的社会の生成・発展・消滅＝移行に要する期間について，大木氏はこれっぽっちも考えていない。いやマルクス・レーニンをやっつけることに夢中で，肝心の人間社会の歴史的発展のあり方についてこれっぽっちも考えることができないのである。「1世紀半もの月日がたっている」とか，「明日にでもおこってもおかしくない」とか言っている君の頭はよっぽどおかしい。人間社会の変革＝移行を遂行するのは人間だけであり，前（旧）社会を支えていた人間である。その人間が，どうして1世紀ぐらいの短期間につぎのより高い社会をつくりあげる人間になることができるか，よく考えてみるがいい。頭にチョンまげを乗せた人間がどうして資本主義社会をつくりだせるか。君は，例の『経済原論』の中で殊勝にも，マルクスを真似て，こう言っている。——「資本主義経済とはどういうものであ

るか，それはどのようなしくみと機能をもった経済であるのか，それはどのように生まれ，発展し，変化し，消滅してゆくのであろうか——資本主義の経済学はこうしたことを理論的に解明するものである」(前出，18ページ，傍点—山本)。

これは40年近くマルクス・レーニンの著作を「勉強」したと広告している大学教授がその教科書の中で言明しているところだ。「むしろ明日おこってもおかしくないくらい」の君の頭の180°転換，というよりも裏切りをこそ，君の文章は実証しているのである。

この論説Ⅰの第三の「レーニンとプロレタリアートの独裁」の本文を一読して驚かされ呆れはてるのは，つぎつぎに出てくる前代未聞のやっつけ文句の連発である。

「そのときレーニンは，苦難のどん底にある農民たちへの一片の同情すらしめすことなく，逆に，かれらが飢餓にうちひしがれていることをこれ幸いの機会として，共産党の一党独裁の邪魔ものとなっている教会勢力にたいするかねてからの念願の弾圧と，教会財産掠奪の極秘指令をだしたのである」(31ページ)。

「レーニンにかかれば，聖職者はすべて極悪の極右反動である。気にいらぬ市民は反動ブルジョアであり，国家反逆分子である。レーニンは「以後数十年にわたって，いかなる抵抗も，それを思うことさえ不可能である」と思いしらせてやるほどに残酷な弾圧の必要を，くりかえし力説している」(35ページ)。

「レーニンの権力に従順にしたがわぬ農民は富農だ。富農は吸血鬼だから，権力に反抗しようとする者へのみせしめに，人びとがその恐ろしさにふるえあがるようなやり方で，しかもさらしものにしてみんなに見せつけなければならない」(37ページ)。

「権力のための殺人鬼，虐殺魔レーニン。もうなんと評したらよいのだろうか。自らの権力のためには，残酷な虐殺をたのしむほどの残虐趣味といったらよいのだろうか」(37ページ)。

「いったん権力をにぎった共産党官僚支配者たちは，彼らの権力を守り，強化するためならば，欺瞞でも裏切りでも，はたまた，放火でも殺人でも掠奪でも，どんなことでも不撓不屈に，確信犯的に遂行する——これこそ民主主義的中央集権制によって規律されたレーニン型共産党による一党独裁であるところのプロレタリアートの独裁にほかならない」(38ページ)。

「レーニンは，その意図どおり，以後数十年にわたって忘れることのできないような残忍な手本をしめした。スターリンと共産党官僚支配者たちは，忠実に，彼らにとっての真に偉大な指導者レーニンの手本をみならったのである。**スターリンは，レーニンがながらく手塩にかけてそだてた忠実な弟子であり，レーニンがさししめしたプロレタリアート独裁の道，一党独裁の道を忠実につきすすんだのである**」(42ページ)。

なんとかしてレーニンを悪者に仕立てあげやっつけてしまおうとたくらんででたらめな「罪科」をこねあげて並べたてたまではよかったが，スターリンを引き合いに出したばかりにその出まかせの大うそがたちまちばれてしまい，このような陋劣とも下劣ともいいようのないデマをふりまくのは世界中でただ一人，大木氏だけであるということを実証することになったのは，

まことに皮肉である。かつてスターリンの「忠実な弟子」を装(よそお)っていたフルシチョフによって「殺人鬼」と命名されたスターリンを下手くそなせりふで「手塩にかけてそだてた」などと書き立てている乃公自身，どんなに醜悪，下劣な根性の表明であるかということすらわけわからない態(てい)である。

上のやっつけ的たわごとの中味をよく見ておくために，この論説Ｉの最初の節の中で，ロシア革命について大木氏が言明しているところを引用してかかげてみよう。

「1917年のロシア革命は，マルクスが『経済学批判』の序言にいうような，資本主義が発展しきったうえでの革命ではなく，その意味では，当時のロシアには社会主義革命の経済的必然性はなかったといえるのである。すなわち，1917年のロシア革命は，職業革命家と称するテロリスト集団の指導するクーデターでしかなかったのである」(25—26ページ)。

革命はそれこそ純粋に政治的事件であるのに，その「経済的必然性」などというどこにもありもしない空文句をふりまわす人間には革命とはどういうものであるか，まったくわけけわからないのも当然である。

ロシア革命は，幾百万，いや幾千万という労働者・農民大衆がツァーと結託した資本家・地主の搾取・抑圧の体制を打ち倒すために武力をもって蜂起した階級闘争である。それは，議会の赤いジュータンの上での平和的な政権交替などではない。まさに血で血を洗う生死をかけての文字どおりの戦いなのである。幾百万という労働者・農民を戦場に駆り立てて殺し傷けたのは，ツァーと結んだ資本家・地主の階級であり，これをあらゆる手段で援助したのがラスプーチンの末裔(まつえい)である多数のギリシャ正教の聖職者である。労働者・農民大衆がどのようして十月革命に参加したか，ジョン・リードの名著『ロシア革命の歴史的記録—世界を震撼せる十日間—』ぐらいは一度目を通したまえ。一部のまっとうな聖職者を除いて多数の聖職者は，1918年，コルチャックとデニキンという叛徒の親方たちが，イギリス，フランスその他の資本主義国から大量の武器と金とそして白衛軍部隊を与えられてロシア国内に侵入し，片っ端から村ソヴェト，市ソヴェトに結集した労働者・農民の家を焼き払い，殺戮し，凌辱し，傷けて，モスクワ近くまで侵略してきたとき，その聖職者たちはなにをしたか？　金色に輝く大ドームの下で，密議をこらして，白衛軍に情報を送り，資金を送り，兵士をかくまい，そしてソヴエトの活動分子を数多くあの世に送ったのである。こうした白衛軍と結んで革命派の人々の殺戮に協力した者が捕われ，殺されるのは，革命にあっては，必然である。読者のレーニンにたいする憎悪をむりやりかきたてるために革命とはどういうものかもわけわからず，この種の反革命派の走狗となった聖職者の処罰をとりあげて「殺人鬼，虐殺魔」と罵言を浴びせるとはなんという，コルチャック，デニキンびいきの走狗であろうか！[8)]

8）いまから20年ほど前のこと，私はヨーロッパ留学のため，ウィーンに下宿して東南欧諸国を歴訪したが，社会主義国とは名ばかりで，その実体は先進資本主義国よりはるかに劣るものであった。粉雪のちらつくコンスタンツア（ルーマニア）の駅で会ったひげ面の農民は，目に涙を浮べながら，コル

5．大木氏の著作の客観的意義

われわれはこれまで真面目に大木氏の著作をとりあつかってきたが，それはまつたく無意味な徒労であったことがよくわかったのである。「スターリンはレーニンがながらく手塩にかけてそだてた忠実な弟子」，「権力のための殺人鬼，虐殺魔レーニン」[9)]——この世界中でだれひ

ホーズの労働がいかにきつく生活がいかに苦しいかを語ってくれたものである。また，当時エンベル。ホッジャ（Enver Hoxha ）の指導する「社会主義国」アルバニアを訪れて１週間ほど滞在し，西独からウィーンまで大型バスで来た反帝同盟の人々と仲間になってアルバニア国内の諸方を見学してまわったが，そこでの貧しさは気の毒なほどであった。もっとも興味をひかれたのは，空き家になっている多くの教会であったが，かつてナチス・ドイツ軍がこの国を占領し支配していた当時，ドイツ軍に協力して，ナチス兵士をかくまい，情報を送り，またレジスタンスの活動家の多くを殺したり傷けるなどしていたそこの聖職者たちが，ナチス占領軍の敗退後ことごとく捕えられ，もっとも悪質な者は処刑されて，一人もいなくなったとのこと，そして現在は反宗教宣伝の場所として一般に公開されているとのことであった。その内部に陳列されてある数々の物品はみな興味をそそるものばかりであったが，なかでもとりわけわれわれが注目したのは，かなり分厚い一冊の聖書であった。手にとって開いてみると，外側からはまったくわからないが，中はすっぽりくりぬかれてあって，ちょうどそこにピストルがはめこまれるような仕掛けになっていた。案内の青年の説明によると，聖職者はその聖書の中にピストルを隠しもっていて，教会に来たレジスタンスの活動家たちの多くを射って傷つけたり殺したりしたのであって，そのため，ナチス・ドイツ軍が一掃されたあと，これら結託したほとんどすべての聖職者たちは，売国奴として処刑されるか国外に追放されるかして，一掃されてしまったとのことであった。聖職者を一掃するという「罪科」を犯したエンベル・ホッジャは，わが大木氏に知られることなく逝って幸せであった。もし生きていたら，ただ「殺人鬼」「虐殺魔」という異名をつけられるばかりでなく，大木君の手で地獄へ送られたことであろう。

9）マルクス主義理論の的確な把握とそのすぐれた適用とは，レーニンひとりがよくなしえたところであるが，彼は，これをふりまわすことなど考えもせず，党内指導層のうちで誤った理論を唱える者には，くりかえし説明して納得させたものである。かのすぐれた理論家ブハーリンの誤謬を懇切に指摘して匡正させた論文はたくさんある。レーニンは，指導層の面々がどんなにひどい誤謬をおかしてもその過ちを匡正させるだけで，これを処罰することは一度もなかったのである。かのトロツキーなどは，早くから匿名でレーニンを攻撃する論文を書きつづけたが，レーニンは，その筆者が誰かをよく知りながら，その誹謗論文を徹底的に批判しただけである。そのトロツキーがレーニンの命令にそむいてブレスト調和の締結を妨げてむりな戦争を続行してソヴェト軍に大きな損害を招いたときにも，トロツキーは叱責されただけで，軍事委員というきわめて重要なポストをそのまま与えられたのである。レーニンは，すべての人間の才能を認めてこれを社会変革に役立つ人間として活用することをつねに考え，またそれをみごとになしとげる人間的力能をそなえた真実の指導者であったのである。これに反して，スターリンは，理論面では最悪の劣等生で，マルクス・レーニンの明示した理論を一つ残らず踏みにじり，変造に狂奔したのであって，1936年にはソ連は社会主義社会になったと宣言し，弁証法的唯物論を歪曲した論文を党史に挿入させたりしたが，もっとも悪辣な変造・歪曲は，世界中の共産党・労働者党のほとんどすべてがけんめいに担ぎまわった例の『スターリン論文』である。人間的には，これほど悪辣で猜疑（さいぎ）心が強く，すべての人をあごで使わないと納まらないという人間はまたとあるものではないのである。彼は，自分よりはるかに人望があり理論面でもまた指導の点でも比べものにならないほどすぐれていたキーロフをば，腹心の配下をつかつて暗殺したのであるが，なんと下劣なことに，キーロフ暗殺に関与したという冤（えん）罪を多数の幹部党員に着せてこれをことごとく処刑したのである。ブハーリンやその他のすぐれた指導的幹部も，すべてでっちあげの罪を着せられて，

とりとして口にすらのぼせないような，事実無根の，まったく卑劣・下劣なデマを大書してかかげているような前代未聞の恥さらしの書いたものなど，読むことすらけがらわしいかぎりである。なんのためにこの下劣・陰険なデマを書きたてたのか？　この汚らわしいデマを弄することで，マルクス経済学からの「寝返り」をうまく「合理化」しようと企むような手合いには，この下劣なデマが反って自分のふりまいた「宣伝広告」がでたらめであったこと，「40年かけてマルクス，エンゲルス，レーニン，スターリン，毛沢東等の著作を勉強してきた」などということが真っ赤なウソであること，マルクス経済学を専攻する格好だけしてきたのはその方が当時はなにかと――たとえば大学に就職して偉い教授になれるとかいう――利益があったからで，学問の研究に挺身するなどということはさらさら考えもしなかったし，またできもしなかったこと，そして，東欧・ソ連の崩壊のニュースを聞いて，マルクス経済学をやっていては損を招く，こんなものとは無縁だということを広告してまたうまい儲け口にありつかなければ，――そこででっちあげたのが無罪証明書としての著書であり，世界中のだれひとりとして口走ることすら考えつかないような下劣きわまりないデマの羅列，とこういう次第がすっかりわかるのである。こんな下劣な産物など，どうして真面目にとりあげれようか。われわれの手が汚物でよごれるばかりである。この無罪証明書の著書が，かえって自身の手のつけようもない不勉強，論理的思考のこの上ない欠落に加えて，その軽蔑すべき品性までもさらけだしているので

情容赦なく葬り去られたのである。かの有名なトロツキーにいたっては，党から放逐するだけでは納まらず，なんと殺し屋をその亡命先きのメキシコにまで送りこんで暗殺したのであって，相変わらずスターリンの側でその走り使いをしてごきげんをとっていたのは，典型的たいこもちモロトフひとりであったのである。ナチス・ヒトラーにへつらって，共同して東南欧諸国の領土掠奪に狂奔したのもスターリンであり，ヒトラーのコンツ・ラーガーを真似た「収容所」をそこらじゅうにつくって，数えきれないほど多くの労働者・農民を，家族もろとも貨車につめこんでつぎからつぎへと送りこんだのも，彼スターリンである。ヒトラーのご機嫌をとって軍備を手薄にしたすきにドイツ軍精鋭大部隊の攻撃をうけて驚くほどの戦死者・戦傷者を出したのも彼スターリンであり，ソ連人民の筆舌につくしがたい犠牲によってようやく勝ちえたにもかかわらず，その勝利を自分一人のおかげとして，なんと図々しくも大元帥に納まり，その上，緒戦の敗走を口実にすぐれた将官トハチェフスキーやその他の優秀な将校たちを銃殺刑にする，ポーランドの将校多数をカチンの森で惨殺する――これこそ，本物の「殺人鬼，虐殺魔」でなくてなんであるか！　彼のかつての部下であったフルシチョフでさえ，スターリンを名指しで「殺人鬼」と呼んだのである。この古今未曾有の殺人狂の頭目をとらえて，「レーニンの忠実な弟子」だの「レーニンが手塩にかけてそだてた」だの，と書き立てて平然としているとは，なんという唾棄すべき下劣漢であることだろうか！　これこそ，最下劣・最醜悪のデマの世界記録である！

ところが，この驚くべき品性と理論的思考の完全欠落とを特色とする世界記録的著書が，鈴木重靖と名乗る人物によって，次のように推賞されているのである。――曰く，「以上，大木啓次著「マルクス経済学を見直す」を私なりに紹介し，おわりに若干の私見を加えておいた。……いずれにしても，はじめに述べたように本書は読むに値する優れた著書である。多くの人に読まれることを期待したい」（『立教経済学研究』第48巻第3号，22ページ傍点―山本）。類は友を呼ぶとは，よく言ったものである。同じ品性の手合いどもがたがいに誉めあって，なんの不思議があろうか！

あって，こうした先物利益の追及に懸命であるでも教授の有様は，見る人の胸に憤懣よりも，むしろ限りない悔蔑と憐憫の情をさえそそるばかりであるのである。

Ⅱ 岡田裕之氏による「社会主義世界体制の崩壊とマルクス経済学の終焉」の宣言

さきの大木氏の著書で見られたような凝りにこった，間違いだらけ，ごまかし文句の羅列といったものもなく，岡田氏の論文は，その表題そのもので氏の脳中にあるすべてをつくしており，そのほかには見るべき論調もないので，われわれとしては，おかげで，それについての論評をできるだけ簡単にすますことにしたいと考える。

まず「社会主義世界体制」という言葉について。これは，よく知られているマルクスの規定した社会主義社会から成る世界体制ということであるのか，それともスターリンのでっちあげた社会帝国主義の強力による支配体制のことを指して言ったものであるか，はっきり答えていただきたい。マルクスのいう社会主義などこの地球上には未だかつて存在したこともないし，いわんや世界体制などというものも影も形もなかった。あったのは社会帝国主義国ソ連の支配体制であり，バルト三国をはじめ東欧諸国すべてはその強力的支配のたがの中で支配され抑圧されていたのである。この事実を知らない人は，スターリンびいきのイカレポンチか，目の見えない人間だけである。だから，崩壊したのはソ連の社会帝国主義的支配体制であり，バルト三国をはじめ東欧諸国はその支配・抑圧のたがから解放されたのである。バルト三国や東欧諸国はこれからはじめて自分の足で自由に歩けるようになったのだ。崩壊で騒ぐことなんか少しもないのである。

岡田氏は，大木氏とは違って，世界史のこと，人類社会の「史的発展過程」についてはすこしはご存じであろう。ロシアで農奴制が公けに倒れたのは1861年である。スターリンが社会主義社会と嘘っぱちの宣言をしたのは1936年，つまり，ロシアは1861年からわずか75年で資本主義社会を通過してつぎのより高い社会主義社会に移行したというのである。これ以上の「インテリ的」気違いは世界に二人とはいない。ロシアについて語るとき，そこに現在でも広般に，根強く残っている農奴制の残存物についてなにもふれないのは，おめでたい明き盲だけである。まあ，ロシアの農村に入ってそこでどんなに古い制度とイデオロギーが支配的に存続しているかをよく見てきたまえ。それでなければベトレームの著書『ソ連における階級闘争』の第3巻をよく読みたまえ。

つぎに「マルクス経済学の終焉」について。君は，マルクス経済学がりっぱな一つの科学であることをご存じないようである。それは，資本主義社会において客観的に，現実に貫徹している経済法則を分析して，それらの法則を体系的に整序してつくりあげた理論体系である。だから，資本主義社会が存続しているかぎり，それらの経済諸法則は客観的に存在し，作用し貫

徹することをやめないし，したがってそれらの経済法則を整序してつくりあげられた科学的な理論体系は依然としてますます誤りなく妥当(ゲルテン)するものとしてりっぱに存続するし，また発展もしなければならないのだ。君は，マルクス経済学が科学であること，客観的な経済法則を体系的に整序した唯一の経済科学であることが――久留間先生の懇篤な教導を受けながら――，ちっともわかっていないのだ。

「物理学の終焉」などと言って見たまえ。ひとは君を精神病院に案内してくれるであろう。経済学が科学であるという，もっとも肝要なことが解っていないという点をとりあげないとしても，この「マルクス経済学の終焉」という文字を大書した君は，二つの大切な問題にたいする答えをすっぽかしているという意味できわめて無責任な，学者にあるまじき態度に終始しているという非難は免れえないであろう。その一つは，マルクス経済学が終焉したというのであれば，他の科学としての経済学をまずはじめに呈示すべきであるのにそれをしていないということである。客観的な経済法則を正しく体系的に整序した別の科学としての経済学をまず先きに示したまえ。それを示さずにただ「終焉」というだけでは，誹謗か中傷というものである。

いまひとつ，ソ連の社会帝国主義的支配体制がめでたく崩壊してバルト三国はじめ東欧諸国がその社会帝国主義的抑圧のたがから解放されたことと，「マルクス経済学の終焉」とが，どうかかわりがあるというのか？　ソ連社会帝国主義的体制の崩壊といい，東欧諸国・バルト三国の解放といい，マルクス経済学の科学としての的確な妥当性を実証するものであり，今後のソ連自体の発展も東欧諸国の発展もそのことをいよいよ実証するはずである。「社会主義世界体制の崩壊」などを「マルクス経済学の終焉」に結びつけて，ベトレームはじめ世界のソ連研究者のひんしゅくを買い，科学としてのマルクス経済学の真実の研究者から相手にされないようになってまで，「マルクス経済学の弔鐘を打ち鳴らす」ことをやめないとすれば，もはや問題は大木氏と同じ物質的利益の領域に移るものであって，われわれの関知するところではないのである。「文は人なり」とは，高山樗牛(ちょぎゅう)が残した私の愛好する名文であるが，まさしく「英雄たち」の心底を言い当てて妙なり，というべきであろう。

おわりに

すでに読者諸君にはおわかりのことと思うが，学術論文には通例結論とか要約とかいうものがあるが，この私の拙論には全く不要である。この拙(つたな)い検討を終えて，なにか汚れたきたないものからやっと離れることができ，目と手を洗い清めることができるという思いが，私の胸にのこっているのである。そこで，読者諸君と私との目と心とを洗い清めるよすがとして，私が座右において時おり繙いては教えられ力づけられている久留間鮫造先生の訳出された『シュミットに与へたエンゲルスの手紙』の冒頭に納められてある「訳者はしがき」の全文をつぎに引用してかかげておくことにしよう。その小冊子は1927年3月同文社刊行のもので，したがって用

語は旧いが，かえってそのほうが，私にはぴったりした感じがするのである。

「左に訳載するはゾチアリスティッセ・モナーツヘフテ Sozialistische Monatshefte, 26. jhrg. /54. Bd./1920. の誌上に連載されたコンラッド・シュミット宛のエンゲルスの手紙の中で，最も一般的興味ありと思はれる部分である。彼の後進者に対する慈父の温情，良師の親切，学者の良心が，字句の間に痛感される。そぞろにエンゲルスの人となりを偲ばしむるものがあると同時に，今日の吾々に取っても亦——特にシュミットと同様に書生の生活からマルキシズムの領野に這入って行かうとする人達に取っては——身にしみて誨へらるる所が少くないと思ふ。その中にはマルキシズムの研究方法，若いマルキシストの陥り易い弊風，ヘーゲルの読み方，マルキシズムの主要問題——唯物史観，価値論・平均利潤率等の問題——が，論文におけるとはおのづから別趣の懇切さを以て説かれてゐる。尤もエンゲルス自身か此等の手紙の一節にも注意している様に，『手紙では参考書等もなしに思った儘を忽卒に書くものだから，常にそこには誤解され得る様な文句が潜入し得る，そこで僕の郷里のライン地方で俗に「乾葡萄(コリンテンシャイサー)の糞ひり」と名付ける種類の男が，その文句の端に喰っついて，それから飛んでもない馬鹿気た意味を引っ張り出す虞れ』がないとは思はれない。にも拘らず，私が茲にこれ等の手紙を紹介する所以は，それが今日の吾々にとって餘りに適切な教訓を含んでいると信ずるからである。」

ここに，とんでもない馬鹿げた意味をひっぱりだす「乾葡萄(コリンテンシャイサー)の糞ひり」のことが書かれているが，よこしまな下心をもってあられもない虚僞の罪をなすりつけるでも教授のほうがはるかにけがらわしい挑発者というべきであろう。

なおこの拙稿の目次の最後に（マルクス主義理論の再検討のための括弧つき「序説」として）と記してあるのは，マルクス主義の政治・経済にかんする基本的な理論について，その意味内容を十分正しく把握しがたい部分，または世界史の展開に応じて正しく発展させるべき部分について検討して，これらを理論として内容豊富で正確なものとして把握しようということなのである。ここで「英雄たち」の所論を取りあげたのは，その正しく発展させるべき部分を曲解して意識的に歪めた例として若干の検討をこころみたもので，その意味でとりあえず「再検討のための「序説」として」と付記した次第である。本題の「再検討」は，このいわば「序説」につづいて論稿『マルクス主義理論の再検討——歴史的社会の現段階における理論的諸問題——』として世に問う予定である。そしてこの現在進行中の論稿にしてなんらか貢献するところが幸いにしてありうるとするならば，前著『人間経済学——科学としての経済学のあり方——』（1994年，青木書店発行）と合せて，私のつたないライフ・ワークとして遺したいというのが，私のささやかな願いなのである。

（1996. 3. 10. 83才の誕生日を迎えて）